

《書 評》

城山英巳著 文春新書

『中国共産党「天皇工作」秘録』

(桜美林大学) 佐藤 考一

本書は、時事通信社の特派員が追った、毛沢東から胡錦濤に至るまでの中国の政治指導者の「天皇」へのこだわりを描いた日中外交の秘録であるという。確かに、日中両政府中枢をはじめ、150人に及ぶ関係者への取材を重ねたというだけあって、貴重な情報がちりばめられている。そして、帯には物々しく、「「天皇を訪中させよ」——。昭和天皇から皇太子まで日中インテリジェンス戦争の内幕」と記されている。以下、内容を簡単に紹介する。

プロローグで、著者は「中日友好に反対する勢力がいまだいる中、天皇訪中の実現は反中勢力が中日友好に反対する根拠を失うことになる」という中国政府幹部の1984年の発言を挙げ、中国にとっての天皇の重要性を浮き彫りにする。第1章：胡錦濤来日秘話では、2008年5月6日に来日した胡錦濤が、天皇に「北京五輪開会式を見に来ていただきたい」と言わずに「いつでも中国に来て下さい」と述べた話が紹介され、中国側にチベット問題や中国製冷凍ギョーザ事件などの日本国内の反中感情への配慮があった可能性、また、訪日を控えた胡が自国の公安省のギョーザ事件での日本の警察へのけんか腰の対応を叱りつけた話や、訪日後の5月12日の四川大地震の際、15日に日本からの国際緊急援助隊を受け入れた話などが紹介され、胡の対日関係重視の姿勢が示される。

第2章：昭和天皇と鄧小平では、1978年に来日した鄧小平との会見の際の昭和天皇の戦争中の「不幸な出来事」に触れた発言が、田中清玄著書の引用と合わせて示され、さらに天皇訪中の話は田中が鄧と会談した1980年当時からあったことが明らかにされる。そして、胡耀邦総書記と中曽根

康弘首相の親交から中曽根の靖国神社参拝で胡耀邦が失脚に追い込まれていく過程と、かつてその部下だった胡錦濤が、2005年以降慎重に胡耀邦の名誉回復を図った話が紹介される。本件は共青团系の団結を示すエピソードとして興味深いが、著者の胡耀邦への評価はかなり低い。

第3章：天皇訪中への道では、まず、1992年の天皇訪中をめぐる、李鵬らが先鞭をつけた天皇訪中工作が、天安門事件と自民党内の反対派の存在で一時頓挫したことが示される。中国政府は、天安門事件を人権問題と見るアメリカと内政問題と見る日本のトーンの違いを理解して、天皇訪中の実現で西側の包囲網の突破を図ろうとする。そして中国の楊振亜大使は、橋本恕大使ら日本外務省の親中派と共に、竹下登元首相を通じて親台湾派の金丸信自民党副総裁を口説き落とし、最後は金丸氏に当時の宮澤喜一首相を説得させて、天皇訪中を決めたのだという。

第4章：毛沢東の天皇観では、日本共産党の野坂参三の影響を受けた毛沢東が、「天皇制の存廃は日本国民が決めることだ」と考え、日本を引き寄せるために、天皇の戦争責任を一切問わず、国交がなかった時代に訪中した日本の要人に何度も「天皇陛下によろしく」と伝えた話が、天皇を戦犯と考えながらも、天皇制の廃止が日本の共産化を招くことを恐れて、天皇を利用する方向に傾くアメリカと足並みを揃えた蒋介石の話と対をなす形で紹介され、中国の政治支配を争った国共両党の天皇の処遇をめぐる見解の一致が示される。

第5章：天皇が最も遠かった時代では、1998年11月の江沢民訪日の際の三笠宮の謝罪のエピソードが紹介されるが、中心は小渕恵三内閣から小泉純一郎内閣にかけての、靖国参拝を絡めた歴史認識問題と中国国内の反日世論の問題である。なお、2004年8月にサッカー・アジアカップ決勝戦での日中対決の際、観衆のブーイングを抑えられないと感じた曾慶紅国家副主席が、責任問題が生

じることを恐れて、観戦をキャンセルしたといわれる話も示されているが、これなどは中国の政治指導者が、今後反日的な世論を抑えられなくなった時に、どのような行動をとるかを考える上で非常に示唆的である。エピローグでは、「時代が変わっても、中国の最高権力者にとって歴史や主権など複雑な問題をはらむ「日本」とどう向き合っていくかは政治的に敏感なテーマであり続けた」と述べ、肩入れしすぎれば「売国奴」扱いされ、一方で米国やソ連の脅威（への対処）、経済協力、民衆のナショナリズムを高揚させる道具としては利用価値がある、と結んでいるが、その中での天皇そのものの位置付けはされていない（括弧内は筆者の補足）。

さて、論評であるが、冒頭に述べたとおり、本書には貴重な情報がちりばめられており、資料的な価値は高い。中国共産党にとっての「天皇」は、中国をめぐる国際環境が変化する中で、日本に利用価値がある時期にだけ、使われる将棋の駒のような（日本人から見れば不愉快な）扱いをされている面があることが、浮き彫りにされていることも重要である。

だが、本書にはいくつか課題も感じられる。まず、技術的な問題点がある。一読して、評者は本書のタイトルと構成に違和感を覚えた。著者の扱っているテーマは、タイトルのそれよりもっと大きい。どの章の内容も、「天皇工作」だけではなく、戦後の日中関係全般にわたっているからである。さらにいうなら、扱われているのは「インテリジェンス戦争」ではなく、困難な日中関係をどう調整するかについて腐心する、両国の外交関係者の姿である。また、各章の構成が時系列に沿っておらず、行きつ戻りつする構成となっている点も、一般の読者には若干わかりにくいであろう。

次に、内容の吟味であるが、第2章では、胡耀邦と胡錦濤の、いわゆる「二胡」を論じているにも拘らず、胡耀邦の元秘書で、胡錦濤とも関係の

深かった鄭必堅（元中央党校副校長）については言及がない。ヒアリングできなかったのだろうか。李克強ら共青团系の中国政府首脳の対日観のあり方と合わせて、今後機会があれば鄭の見解を探ってみて欲しいところである。第3章には、3つ疑問点がある。①中国側に天皇訪中を依頼された日本側の関係者は、本書を見る限りでは、ただ、その意向を酌んだ形で実現のために必死で動いたように見える。だが、中国政府は日本側になんの見返りももたらさなかったのだろうか。②金丸副総裁に圧力をかけられた宮澤首相は、具体的に天皇訪中に反対する誰を、何時、どうやって説得したのだろうか。③天皇の中国訪問が決まってからの中国側の準備について、あるいは実際の天皇訪中についてのエピソードの紹介が本書では非常に少ないが、具体的にどうだったのか。

①については、日中友好二十一世紀委員会日本側座長として、また外務省のアドバイザーとして、長く日中関係の発展に尽力した岡部達味東京都立大学名誉教授の著作を見ると、日中関係にたずさわってきた心ある人々が、何かというと謝罪をしなければならないような関係は、真の友好関係というには遠いと考え、「歴史教訓」を「中国側は言わない、日本側は忘れない」という方向へ持っていこうと努力してきたことが記されている（岡部達味『日中関係の過去と将来 誤解を超えて』岩波現代文庫、2006年、65-68頁）。日本の外務省関係者も岡部教授のような民間のオピニオンリーダーも、そのために中国との関係の発展に努力してきたのであり、天皇訪中における陛下の（中国国民に与えた多大の苦難に対する反省の）「お言葉」がその総仕上げの意味を持っていたというのである。そして、この「国家元首のお言葉」に満足した中国側は、「積極的に歴史問題を提起するようなことはもうしない」と非公式に伝えてきたと言われている（岡部達味「日本外交の行方」『東亜』1998年12月号、48-64頁、岡部達

味『日中関係の過去と将来 誤解を超えて』前掲、92-94頁)。

中国側は、1992年当時は歴史問題提起の自制という、将来の真の友好関係の発展につながる無形の見返りを用意し、慎重に日本の将来を見極めようとしていたのである。だが、この話は、1994年の永野茂人法相の「南京大虐殺」デッチアゲ発言で、台無しになってしまう。そして、元々反日的傾向の強かった江沢民が、総書記、国家主席、中央軍事委員会主席と権力の中樞に長く留まったこともあり、中国側はこの後、反日教育に力を入れるようになる。これが、小泉政権末期の2005年4月の北京、上海での反日暴動の遠因となった。暴動が拡大した背景には、携帯電話の普及の影響も大きかっただろうが、中国側が自ら育てた反日世論を抑えられなくなったということもある。第5章で、著者が挙げた曾慶紅国家副主席のサッカー観戦キャンセルのエピソードは、これに類する話である。

②については、わからないことが多い。自民党内でタカ派と言われた藤尾正行元文部相が訪中反対の急先鋒だったことは、本書の中でも触れられているが、宮澤首相およびその側近が何時、誰を説得したのかは、あまり明らかにされていない。ただ、どうやって説得したかについては、宮澤首相は示唆を残している。それは、「陛下ご自身が(訪中に)関心をお持ちだったものですから……それがなんとなく伝わって、それじゃあ自分たちがそれをお止めするようなこともよくないな、というような反省もあったらしい」ということである(御厨貴・中村隆英編『聞き書 宮澤喜一回顧録』岩波書店、2005年、310-311頁)。様々な形で、日中友好に積極的な「陛下の意思」が説得に使われたらしいのである。

③については、『人民日報』や日本の各種全国紙などの当時の日中両国の報道を見ればそのあらましがわかる。これらをまとめる作業は評者も過

去にしたが、それらの資料の中では、アメリカ人研究者のアレン・S・ホワイティングが中国で行ったヒアリングをまとめた著書に興味を引かれる記述があった。ホワイティングは、天皇の北京、西安、上海への6日間の訪問に際して、「賠償請求者の首都からの追放、そしてパレードの間の何千人という制服私服の警察官の警護」が行われたこと、また天皇の「お言葉」に対してある匿名の中国外交部官僚が「謝罪にはほど遠い」と言ったことも、記している(アレン・S・ホワイティング(岡部達味訳)『中国人の日本観』岩波現代文庫、2000年、329頁)。

いずれにしても、これからも歴史認識問題のついてまわる中国との付き合いは一筋縄ではいくまい。2009年12月の習近平国家副主席の訪日の際の、1カ月前の申込みという慣例を破っての天皇との会見は議論を呼んだが、陛下の英慮で実現した。全国紙の報道では、会見を懇請した鳩山由紀夫首相を非難する論調ばかりが目立ったが、反日感情が強いであろう、軍人の息子である習副主席の面子を潰さなかったことは日中関係の将来のためにはよかったと思われる。日中の道を誤れば、それは日本国民の利益を損なうだけでなく、友好親善と平和を祈る陛下の意にも沿わないことになる。日本の政治家、マスコミは、困難な日中関係の現状をよく勉強して、前人の轍を踏まないようにして欲しい。最後に一言するなら、現在の陛下の再度の公式訪問はあり得ないということがある。皇室の「外国交際」の慣例で、公式訪問は一代の天皇について一回限り、後は「お立ち寄り」の扱いとなるからである。いろいろ注文を付けたが、日中関係の危うさを活写したという意味で、本書が大きな価値を持つことは間違いのない。これからの著者の、ますますの健筆をお祈りしたい。

(2009年8月刊、261ページ、税込798円)